

《善き牧者キリスト》像のアルコソリウム

—— ドミティッラ地下共同墓地の作品研究 ——

山 田 順

目 次

1. 問題提起
2. 地誌学的研究成果
3. 作品分析
 - ①アルコソリウム NR.67
 - ②アルコソリウム NR.70
 - ③アルコソリウム NR.72
4. 考察
5. まとめ

1. 問題提起

キリスト教がローマ帝国という国家権力との関係を深め、歴史の檣舞台へと駆け上がって行った4世紀、キリスト教はいかに「変容」し、いかに「変質」を遂げたのか。ローマのキリスト教地下共同墓地（カタコンベ）は、このキリスト教史最大の激動の時代の日撃者であったり。

ローマのキリスト教考古学の研究成果によって、これらの素朴な埋葬空間から、当時のキリスト教一般信徒の手による多くの壁画や墓碑銘が出土している。それらのなかにキリスト教の「変容」、「変質」の痕跡を読み解くこと、これが筆者の長期的研究課題である。この研究の端緒としてこれまで、筆者は、墓所壁画における《善き牧者キリスト》像の消失問題とそのプロセス²⁾の解明を主

な目的に、ローマの地下共同墓地内部で考古学的・図像学的調査を継続的に行ってきた³⁾。

迫害期を含めた最初の数世紀の間、多くの一般信徒を励まし続けた《善き牧者キリスト》像という、弱き者・貧しき者に寄り添うような「同伴者的救済者」のイメージは、4世紀末から5世紀初めにかけて、《万物の支配者》像あるいは《審判者》像といった「権威的救済者」のイメージへと変容する。このキリスト像の図像変化のプロセスとその意味を深く掘り下げながら考察することは、4世紀という時代を一般信徒の視点から捉えるという意味においても、極めて重要だ。救済者の図像が大きく変容するという「現象」の背後で、彼らを取り巻く状況や彼らの内面世界に何が起こっていたのか。この問題の解明には、教会指導者層が書き残した文字史料と同様に、地下墓所の暗がり忘れ去られた数多くの一般信徒の墓や壁画に個別に向き合いながら、データの集積と分析・考察を継続的に行っていくことが不可欠である。

本稿では、ローマの地下共同墓地においてこれまで十分な観察や分析が行われてこなかった4世紀の《善き牧者キリスト》像の壁画のなかから、特にドミティッラのカタコンベのアルコソリウム（アーチ型壁龕墓）の作例に注目し、それらの図像作品の分析および墓の類型学的考察を行いながら、そこに4世紀のキリスト教一般信徒を取り巻く変化の痕跡を読み解きたい。

2. 地誌学的研究成果

本稿で扱うアルコソリウムとは、本体下部に遺体を納める棺状の埋葬スペースを備え、その上部にアーチ型のニッチ（壁龕）が施された、キリスト教・非キリスト教を問わず古代末期の埋葬領域で一般的であった墓の一類型である⁴⁾。キリスト教地下共同墓地で最も多くみられる棚状に掘られた単純な墓穴タイプのロクルス（棚型墓）に比べると、よりモニュメンタルで装飾的性格を有している。事実、アルコソリウムのなかには、壁面を成形した後、表面に白色の化粧漆喰が施され、その上からフレスコ画法で壁画が描かれたものが多く存在す



図1 ドミティッラのカタコンベ 全体図 ○網掛けは「1897年の大階段」地区を指示

る⁵⁾。このようなアルコソリウムに描かれた《善き牧者キリスト》像は、ローマの地下墓所の主に3, 4世紀の発展地区から多数出土しているが、ローマ市街南部に位置するドミティッラのカタコンベにも多くの作例が確認され、特にそこでは、《善き牧者キリスト》像が集中的に描かれた地区が発見されている⁶⁾。

このドミティッラのカタコンベ(図1)は、アツピア街道の南側を走るアルデアティーナ街道沿いの地下に広がる共同墓地で、そこには迫害期の殉教者の墓が複数存在したことから、ローマの『巡礼案内』などの古代文献にもその存在が記されている⁷⁾。19世紀後半、デ・ロッシとその弟子たちによって組織的発掘が開始されて以来⁸⁾、20世紀半ばまで断続的に行われてきた研究調査によって、このカタコンベは、主要本体が地下二層(一部四層)構造で、地下通

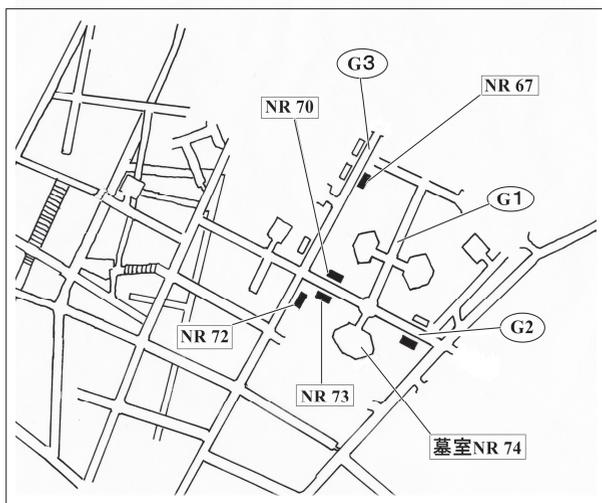


図2 ドミティッラのカタコンベ 平面図 「1897年の大階段」地区・地下第一層西側

廊の総延長が15km 超に達する大規模なものであることが明らかになっている⁹⁾。また、発生史的研究成果によれば、本来、独立して存在していたと思われる小規模な地下墓所が少なくとも7つ確認され、それらが徐々に地下通廊の延伸・結合を繰り返しながら、今日のような大規模な地下墓所が形成されるに至ったと考えられている¹⁰⁾。また、年代史的には、主に出土した墓碑銘に刻まれた日付や墓の類型学的特徴などから、これら7つの地区のうち5つまでが、コンスタンティヌス帝治世以前にその発生起源をもつ可能性が高いという¹¹⁾。

このカタコンベの南西部・地下第一層に、1897年、ローマ学派の考古学者、E. スティーヴンソンと O. マルッキによって発掘され¹²⁾、その発掘年を冠して〈1897年の大階段地区〉と呼ばれる場所が存在する(図1・2)。この発掘によって、同地区の「大階段」西側から特徴的な多角形平面プランをもつ三つの墓室と、その周囲の通路沿いから複数のアルコソリウム、および、墓に施された《善き牧者キリスト》像の壁画が集中的に出土している¹³⁾。なお、この地区の発生年代に関しては、1970年代に本カタコンベの地誌学的研究を行った F. ペルゴラによって、4世紀以降の発生・発展地区との見解が提出されている¹⁴⁾。

3. 作品分析

本稿では、筆者が2011-2012年にこの地区で実施した現地調査¹⁵⁾のデータのなかから、《善き牧者キリスト》像の壁画画像が描かれた3基のアルコソリウムに注目し、個別の作品描写と分析を行う。

①アルコソリウム NR.67

アルコソリウム NR.67 (図3 a-b)¹⁶⁾は、〈1897年の大階段地区〉の西側、通路 G3 (図2) の南端近くから発見された個性的な少年の肖像画 (図4) が印象的な墓で、構造的にはローマのキリスト教地下墓所における最も典型的なアルコソリウムの類型に属するものである。すなわち、上部に〈ヴォルト型〉アーチとリュネッタ (半月型奥壁) を備え、本体下部はトゥーフオ (凝灰岩) を棺状に掘り込んで造られた埋葬空間によって構成されている。多くのアルコソリウムの類例がそうであるように、本体下部のみならずリュネッタにも横幅約125cm とやや小振りなロクルス (柵型墓) 跡が確認される。

通常、このタイプのアルコソリウムには、本体下部の棺部分に一体から複数体の遺体が納められるのが常であるが、この NR.67 の場合、リュネッタのロクルスの小振りな墓穴サイズを鑑みると、壁画に描かれた男児がそこに、そして、本体下部の棺にその両親、あるいは他の家族が埋葬された可能性が推測される¹⁷⁾。もはや僅かな断片を残してすでに多くが失われてしまっているものの、リュネッタと棺の開口部縁に、それぞれ、墓蓋として使用された大理石片が確認されることから、後述する壁画の少年の服飾の特徴と合わせて、被埋葬者の家族の比較的裕福な経済状況が窺える。

壁画装飾に関しては、まず、本体下部、石棺部前面壁に太めの赤色帯が斜めに交差した格子模様が描かれている。これは、同時代の非キリスト教葬礼領域でも散見される《庭園》図の「格子垣」で¹⁸⁾、死後の牧歌的理想世界を表象しており、被埋葬者がすでに彼岸の安らぎの内にあることを祈念している。

奥壁のリュネッタには、左右を二羽の鳩に挟まれた赤い円環枠の内部に、す

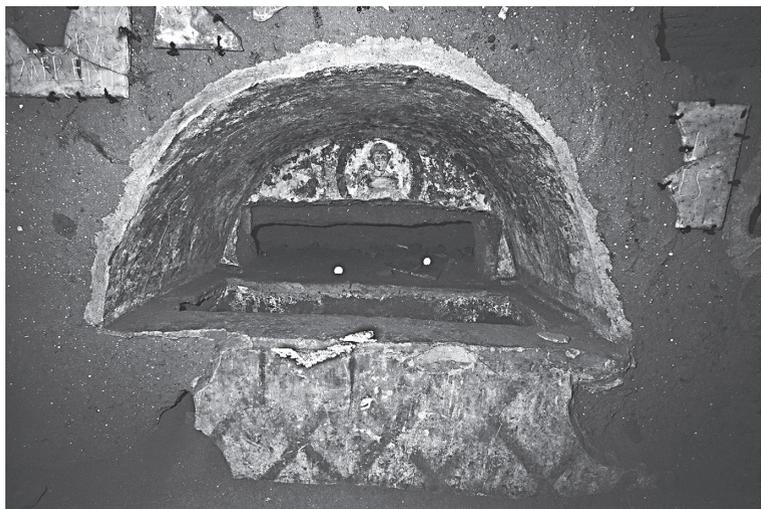


図 3 a ドミティッラのカタコンベ NR.67 アルコソリウム 全体

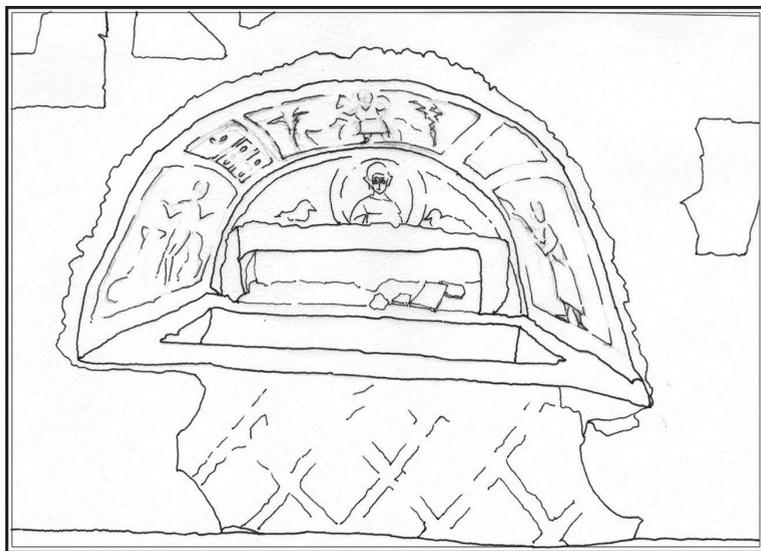


図 3 b ドミティッラのカタコンベ NR.67 アルコソリウム 全体 (トレース画)



図4 NR.67 アルコソリウム 男児の肖像

でに言及した男児の肖像画が描かれている（図4）。トゥニカとパリウムという古代ローマ社会の古典的な正装に身を包んだ短髪の少年像は、大きく見開いた瞳と太く弧を描いた眉、左右に開いた特徴的な耳、口元に微笑みをたたえて僅かに首を傾げた姿など、故人の個性的な特徴を捉えながら、聡明で愛らしい姿の少年の記憶を留めようとしている¹⁹⁾。

また、観者からは見えにくい〈ヴォルト型〉アーチ下の内壁は、やや太めの赤色帯によって天頂（中央）部と左右の三つの装飾空間に枠取りされ、これらの画面にそれぞれ異なった主題の壁画が描かれている（図3a, b）。男児の肖像画の円環枠上部が接するアーチ天頂部には、退色が進み保存状態は極めて悪いものの、画面左に向かって突き出した右手に三角形のパン・フルート（葦笛）を携えたひとりの人物像が確認できる。さらに詳しく観察を進めると、この人物は一匹の羊を肩に担ぎ、その左右の足元に二匹の羊、さらにその背後に二本の木といったパターン化された牧歌的楽園の図像要素とともに描き込まれており、この壁画が、よく知られた典型的な《善き牧者キリスト》²⁰⁾の図像類型のひとつであることが理解される。

さらに、アーチ内壁の左には《獅子の穴のダニエル》場面²¹⁾（図5）が、また、内壁右には《モーセによる泉の奇跡》場面²²⁾（図6）がそれぞれ確認される。前者は、獅子の穴に投げ込まれたダニエルが神に祈ると獅子たちは危害を



図5 NR.67 アルコソリウム アーチ内壁左
《獅子の穴のダニエル》図



図6 NR.67 アルコソリウム アーチ内壁右
《モーセによる泉の奇跡》図

加えなかったという、旧約聖書のダニエル書に記された逸話を典拠とするものであり²³⁾、また後者は、出エジプト記に登場するモーセの奇跡物語を図像化したものである²⁴⁾。いずれも、キリスト教葬礼美術の絵画レパートリーにおいてよく知られた古典的図像群に属するもので、それらは、神の「救済」や「救済の業」の象徴として解釈され、故人の魂の救いを祈念し保証するための記号として機能していたと考えられている²⁵⁾。

アルコソリウム NR.67 に確認されるこのような墓の類型や壁画装飾の図像的特徴は、この墓が4世紀に多用されたアルコソリウムの典型的作例のなかに位置づけられることを示している。アーチ内壁に描かれた《善き牧者キリスト》像と旧約聖書の二つのエピソードの図像との組み合わせによる使用も、特にそこに新しさはない。

一方、奥壁・リュネッタの赤い円環枠に描かれた個性的な男児の肖像画の存在は、キリスト教葬礼領域固有のものではなく、古代末期の非キリスト教（＝異教）葬礼領域一般において、石棺浮き彫り装飾のメダイオンや地上の霊廟建築の外壁などに確認されるような故人の肖像の同一線上にあると言えよう。キリスト教地下墓所の2・3世紀の層ではほとんど確認されないこのような個性的な特徴を備えた被埋葬者の肖像画の存在は、4世紀に急激に拡大するキリ

スト教共同体の内部に、家族の肖像彫刻や肖像画を残す古代ローマの伝統的慣習を継承する比較的富裕な社会層が、確実に増加していたことを示している。

②アルコソリウム NR.70

〈ヴォルト型〉アーチを備えた伝統的類型に属するアルコソリウム NR.67 に対して、同地区の通廊 G2 (図2) 沿いから出土したアルコソリウム NR.70²⁶⁾ は、特に墓の類型学的視点から興味深い特徴を備えている。

埋葬スペースとして成形された本体下部の棺部分は従来のもとの構造的に何ら変わらないが、上部構造を構成する奥壁・リュネッタが、ここでは大きく圧縮されたように縮小され、さらに、本来〈ヴォルト型〉に成形されるのが一般的であるアーチ部分が、奥に向かって大きく傾斜しながらリュネッタ上部に覆い被さっている (図7 a, b)。つまり、前述のアルコソリウム NR.67 で見た典型的な〈ヴォルト型〉アーチが、ここでは、まるで地上の教会堂建築に見られるアプシスのような四半球形に近い形に変えられている。また、縮小されたリュネッタには、その墓穴サイズ (約34×98cm) からおそらく新生児か乳幼児用のものと思われるロクルス跡が1基確認できる。このようなくアプシス型〉のアルコソリウムは、ローマのキリスト教葬礼領域において他にほとんど類を見ない。

この特徴的な構造を備えたアルコソリウムを飾る壁画に関しては、まず、下部の棺前壁が赤と白の帯で縁取りされた三枚の〈擬似大理石装飾パネル〉²⁷⁾ で飾られ、墓全体に重厚感とモニュメンタルな印象を与えている。また、この〈アプシス型〉のアーチ内壁は、従来の〈ヴォルト型〉と同様に赤と白の帯を使い分けながら三つの装飾空間に枠取り分割されている。そして、その中央の画面には肩に一匹の羊を担った《善き牧者キリスト》像が、左右の足元に二匹の羊と二本の木が配された典型的な構図で描かれている。一方、アーチ内壁左には、先の NR.67 でも登場した《モーセによる泉の奇跡》場面が、また、内壁右には、同じく、カタコンベ壁画の図像レパートリーのなかで度々登場する《ラザロの復活》場面²⁸⁾ が、死者の復活や救済を祈念する主題として選択され



図7a ドミティッラ NR.70 アルコソリウム 全体

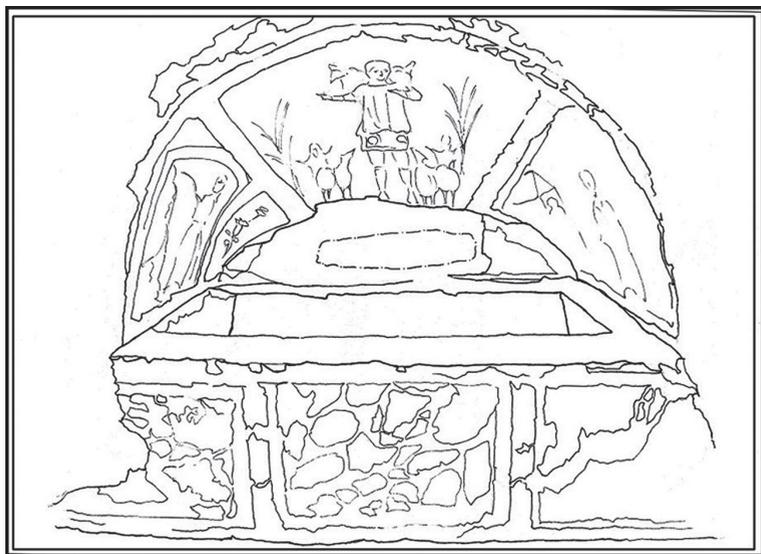


図7b ドミティッラ NR.70 アルコソリウム 全体 (トレース画)



図 8 a ドミティッラ NR.70 アルコソリウム
被埋葬者・女性肖像



図 9 a ドミティッラ NR.70 アルコソリウム
被埋葬者・男性肖像



図 8 b ドミティッラ NR.70 アルコソリウム
被埋葬者・女性肖像 (トレース画)

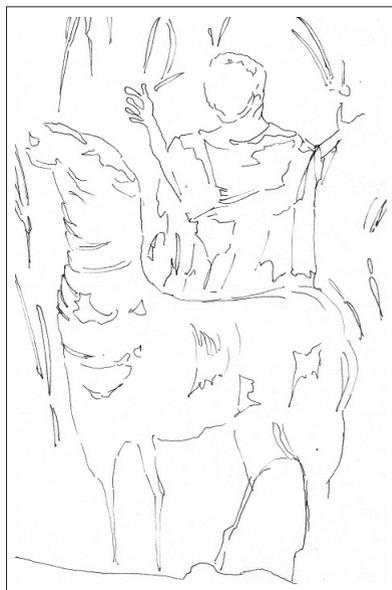


図 9 b ドミティッラ NR.70 アルコソリウム
被埋葬者・男性肖像 (トレース画)

ている²⁹⁾。

すなわち、このアルコソリウム NR.70 は、構造的には〈アプシス型〉に変形された斬新なアーチを備えているものの、その墓の壁面を飾る壁画装飾については、基本的に、従来の〈ヴォルト型〉と同様の伝統的図像主題の選択や構図を適用している。

ところが、《善き牧者キリスト》像についてその細部まで観察していくと、先のアルコソリウム NR.67 のそれとは異なる小さな、しかし重要な特徴に気づかされる。すなわち、ここでは、この墓の二人の被埋葬者の姿が、《善き牧者キリスト》像のその場面のなかに登場している。それは、牧者キリストの左右に位置する二匹の羊の向こう側に、注意しなければ見落としてしまうほど小さく控え目に描かれた女性像（図 8 a, b）と男性像（図 9 a, b）で、二人は両手を広げたオランス（祈り）の所作で草花の茂みのなかにまるで隠れ入るように立っている。白色の描線を無駄なく効果的に使用しながら熟練したタッチで描かれたこの二人の故人像は、とりわけ、開いた掌の指一本一本が明確に描写され、二人がすでに神の恵みの平安のうちにあることを保証するための〈オランス像〉としての意味内容が強調されている。さらに、頭にベールを被り古代末期の長衣〈ダルマキア〉を身にまとった左側の女性像については、細やかに描かれた顔の表情を現在でも十分に確認することができ、その眼差しが右隣の牧者キリストを確実に捉えていることが理解できる。

③アルコソリウム NR.72

アルコソリウム NR.67 と同じ通廊 G2 の北側から出土したアルコソリウム NR.72³⁰⁾（図10a, b）は、墓の新たな類型学的特徴と図像学的要素が融合した作例として興味深い。

このアルコソリウムは、前述の NR.70 とほぼ同様に、通常より縮小されたリュネッタと四半球形に傾斜した〈アプシス型〉アーチを備えている。その壁画装飾に関しては、まず、アルコソリウム下部の棺部分の前面壁に、今ではその多くが欠損してしまっているものの、NR.70 と同様、そこに三枚の〈擬似大



図10a ドミティッラ NR.72 アルコソリウム 全体

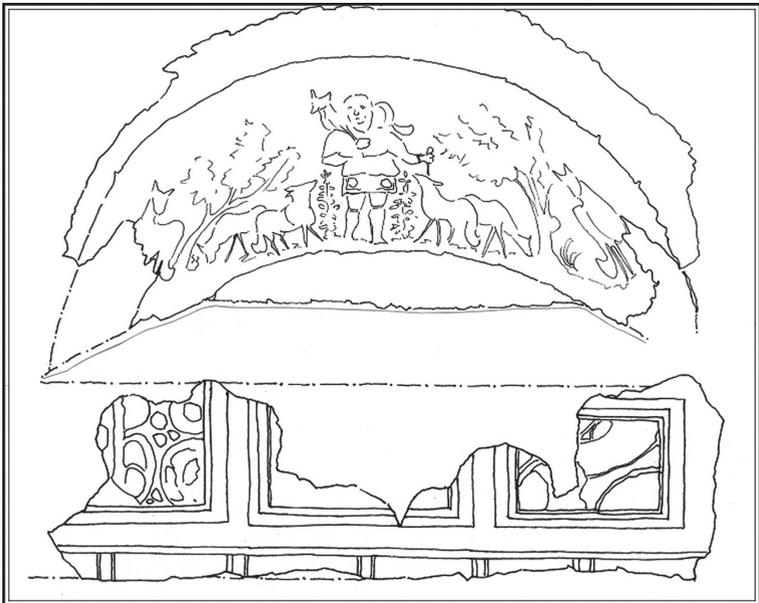


図10b ドミティッラ NR.72 アルコソリウム 全体 (トレース画)

理石装飾パネル〉が赤・白・緑の帯の縁取りとともに巧みに描かれていたことが窺える。一方、〈アプシス型〉アーチの内壁装飾に関しては、ここでは NR.67, NR.70 の両者で採用されていた三分割の図像空間の枠取りが完全に放棄され、湾曲した壁面全体を最大限に利用しながら、牧者キリストを中心とした牧歌的楽園世界の単一場面が、アルコソリウム内部一杯にダイナミックに展開されている。

つまりこの墓の壁画装飾は、《獅子の穴のダニエル》、《モーセによる泉の奇跡》、《ラザロの復活》といったアルコソリウム NR.67, NR.70 にみられた神の「救済」や「救済の業」の記号として慣用化された伝統的図像主題の使用を放棄しながら《善き牧者キリスト》像を中心とした天上界の牧歌的楽園表象の描出のみに集中している。

画面中央に描かれた《善き牧者キリスト》像は、左右二匹の向き合う羊に挟まれた〈基本型〉を適用しながらも、その左右に広がる空間を最大限に利用しながら、それぞれ異なる動きの羊をさらに左右二匹ずつ、都合四匹配置することで、天上の楽園世界の安らぎと穏やかさを暗示する〈牧歌性〉を強調している。単一場面という装飾空間の拡大によって発生した牧者や羊たちの像の隙間を埋め尽くすように描き込まれた種々様々な草木の存在もまた、同様の目的の実現に貢献している。

先のアルコソリウム NR.67 のように時に故人の肖像で飾られる奥壁・リュネッタは、ここでは、もはや牧者キリストが存在し羊たちが草を食む大地と化して緑色で塗り尽くされ、その大地に転がる赤褐色の石の塊で縁取られながら、「救済の場」としての楽園世界の一部に完全に組み込まれてしまっている。

このように、前述のアルコソリウム NR.70 との構造上の相似性にも関わらず、NR.72 の図像装飾におけるコンセプトには、伝統的装飾図像の構成を放棄し、アプシス型の形状を利用しながら、〈救済者キリスト〉の姿とその楽園世界を大きく描き出し強調しようとする斬新さが窺える。

4. 考 察

以上、ドミティッラのカタコンベから発見され、今日までほとんど注目されてこなかった3基のアルコソリウム NR.67・NR.70・NR.72 について、それぞれ、墓の類型学的特徴および壁画の図像学的特徴について、筆者の現地調査の成果をもとに報告した。以下、これら三つの作例について、さらに相互に比較・分析を加えながら、そこから明らかになる新たな変化の痕跡について指摘し、その意味を考察したい。

① 〈アプシス型〉構造への志向性とその意味

3基のアルコソリウムの構造的特徴について比較するとき、すでに個別に確認したように、NR.70とNR.72の両者に見られる、従来の〈ヴォルト型〉構造を示すNR.67とは異なった、縮小されたリュネッタと〈アプシス型〉に成形された特殊なアーチ構造が、新たな変化として指摘できることは明らかだ。

実は、同様の形状をもつ単独墓³¹⁾としてのアルコソリウムが、この同じ地下第一層地区内に、本稿で扱うNR.70・NR.72以外に少なくとも2基出土しており³²⁾、さらに、これらの単独墓に隣接する墓室NR.74の内部に備えられた4基のアルコソリウム全てが、同様の〈アプシス型〉構造を示している³³⁾。加えて、この墓室NR.74³⁴⁾ (図11)には、多角形平面プランに成形された内部空間上部に、左右二つの巨大な四半球形アプシスが確認できる。

〈アプシス型〉アルコソリウムはローマのカタコンベにおける墓の類型を見渡しても稀なものだが、僅か数十メートル四方の限られた範囲に、同様のアプシス構造を備えたアルコソリウムが9基も集中しており、さらには、上部構造に〈アプシス〉そのものを備えた墓室が近接して存在していることは、注目すべきことであろう³⁵⁾。なぜなら、このような〈アプシス型〉構造への強い志向性は、同地区を埋葬空間として使用していた人々にとって、それが何らかの重要な意味をもち、さらに、その意味や重要性が彼らに共通に認識されていた可能性が推測されるからだ。



図11 ドミティッラ NR.74 墓室 CG復元図

ところで、カタコンベ地誌学の第一人者である V. フィオッキ・ニコライは、4 世紀のカタコンベ内部における墓室類型の多様化のなかで、特に、アプシスなどのモニュメンタルな建築要素の導入は、同じ時代に、すでに都市ローマに出現し始めていた地上のキリスト教礼拝施設にみられる内部構造を個人的な地下墓室の内部に再現しようとする、当時の一般信徒の強い願望の現れである可能性が高いと指摘している³⁶⁾。

確かに、今日までのキリスト教考古学は、313年のコンスタンティヌス帝によるキリスト教寛容令直後から、ローマの市壁内外に初めての地上の礼拝施設の建立が開始されたことを確認している³⁷⁾。そして、4 世紀中頃から後半には、すでに巨大なキリスト教聖堂が数多く建設され、それはローマの都市景観を大きく変えるほどの勢いであったという。当然ながら当時の一般信徒らもまた、それら都市ローマの新たなランドマークになりつつある地上に聳え立つキリスト教礼拝堂を、驚きをもって眺めたことであろう。おそらく彼らは、カタ

コンベに埋葬された殉教者を記念して建てられた巨大な殉教者記念礼拝堂³⁸⁾などを、その記念の祝祭や巡礼などの機会に度々訪れ、アプシスなどの壮麗な内部構造と装飾に圧倒されながらそれらを眺めたに違いない。

同時に、今日までに行われてきた、主にカタコンベの地上に建立された4世紀起源の複数の殉教者記念礼拝堂の考古学的発掘調査は³⁹⁾、そこに記念された殉教者の墓を囲むように会堂の床を埋め尽くす多くの一般信徒の墓の存在を確認している⁴⁰⁾。このような状況は、殉教者や聖人の墓の近くに自らも埋葬され、彼らによる執り成しの恩恵に与りたいとする、当時の初期キリスト教一般信徒の間に広く存在していた素朴な願望や崇敬を表わすものとして理解されている⁴¹⁾。

このように、地上のキリスト教礼拝施設の出現や当時の一般信徒に浸透していた聖人崇敬のメンタリティーを鑑みると、先にみたフィオッキ・ニコライが指摘する、地上に出現したキリスト教建築の個々の要素が地下共同墓地内部の個人の墓室構造にもたらされたとする見解は、極めて納得のいくものと言えるだろう。地上に出現した新たなキリスト教礼拝堂の聖域を構成するアプシス構造とその壁画装飾図像を羨望の眼差しで眺めた彼らが、それらを個人の救済実現へのひとつの重要な要素として捉え、自らの地下墓室の内部構造にそれらを「再現」しようと強く望んだことは、さほど想像に難くないことだからだ。

そのように考えるとき、墓室に限らずアルコソリウムという単独墓に確認される〈アプシス型〉への強い志向性もまた、その背後に、同時代の一般信徒の同様のメンタリティーが存在していると考えるのが自然であろう⁴²⁾。墓室という一族用埋葬施設を所有するほどの経済的余裕はなく、個々の小規模な単独の墓で満足せざるを得なかった一般信徒にとっては、アルコソリウムの従来の〈ヴォルト型〉アーチを〈アプシス型〉に変形させるというささやかな試みが、キリストによる救済や殉教聖人による執り成しの力を希求しようとする、彼らにできる最大限の素朴な願いの表れであったのかもしれない。

②〈アプシス型〉アルコソリウムと壁画装飾

NR.70, NR.72 が示す〈アプシス型〉アルコソリウムという類型学的な新らしさは、その壁面を飾る壁画図像にどのような変化をもたらしているのだろうか。その変化の痕跡を明確にするために、まず、従来の〈ヴォルト型〉アーチタイプの NR.67 について、その壁画の基本的な構成要素について、再度、要約しながら確認しておきたい。

そこでは、まず、〈ヴォルト型〉アーチ内壁が、多くのアルコソリウムがそうであるように、天頂部と左右の画面に大きく三画面分割構成されており、その天頂部に最も重要な救済者の図像、すなわち、ここでは《善き牧者キリスト》像が典型的な牧歌的図像要素とともに描かれている（図3a, b）。そして、その左右の画面には、主に聖書の奇跡物語りなどを題材にした定型化された図像—ここでは《獅子の穴のダニエル》と《モーセによる泉の奇跡》—が配置され、キリストによる「救済」や「救済の業」が暗示される。さらに、十分にそのスペースが確保されたアーチの奥壁・リュネッタは、この場合、墓に埋葬された男児の記憶を鮮明に留めるための故人の肖像空間として活用されている。そして、このリュネッタ上の故人の肖像と、〈ヴォルト型〉アーチ内壁の《善き牧者キリスト》像が、観者の同一視線上で統合されながら、〈救済者と救済された者〉（*Salvatore e Salvato*）⁴³⁾という墓の壁画装飾全体の中心的意味内容を描出するように意図されている。

さて、新たな〈アプシス型〉構造を取り入れたアルコソリウム NR.70 でも、その装飾に、NR.67 と同様に伝統的従来型の赤ラインの枠取りによる三画面分割構成が導入され、中央に《善き牧者キリスト》としての救済者像が、左右には《モーセによる泉の奇跡》、《ラザロの復活》という救済のシンボリズムが展開されている。すなわち、この NR.70 では、構造的には従来型と異なった新たな〈アプシス型〉が導入されながらも、その壁面を飾る図像とその枠組みに関して、古典的なカタコンベン絵画の構成要素がそのまま適応されている。

ところが、その一方で、この〈アプシス型〉アーチの導入によって必然的に縮小されたリュネッタは、もはや、NR.67 に見るような被埋葬者の記憶を留め

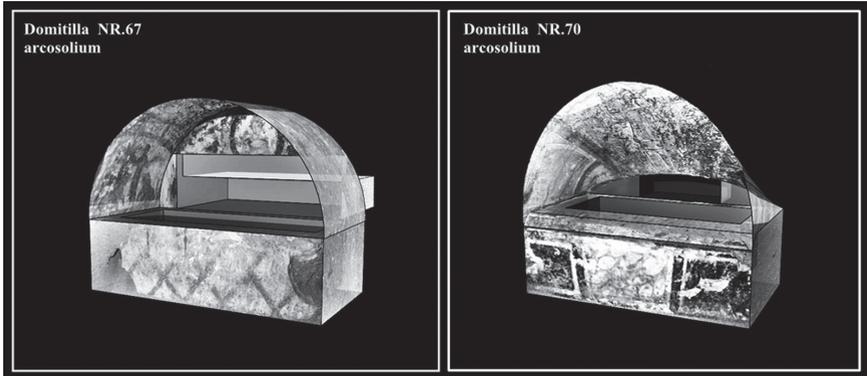


図12 ドミティッラ NR.67 (左) NR.70 (右) アルコソリウム CG復元図

るための図像空間としては不十分であったために、埋葬された夫婦の姿が、《善き牧者キリスト》像が描かれている牧歌的楽園場面の内部に「侵入する」という現象が発生している。そこでは、オランス姿の故人像が牧者の両脇の羊に重ねるように描かれることで、〈善き羊飼い〉と羊たちという「関係のモチーフ」によって語られる福音書の譬えのキリストの救いの業が、この墓の被埋葬者という特定の人物への救済へと意図的に適用されている。

すなわち、アルコソリウム NR.70 では、それまで、リュネッタとアーチ内壁という異なった壁面に描き分けられていた故人の肖像と救済者像が、〈アプシス型〉アーチ構造の導入に伴って、同一画面上に統合されて描かれ、そこに、被埋葬者の救済を希求する願いがより直接的な手法で描出され強調されていると言えるだろう。

同じく、新たな〈アプシス型〉構造を取り入れた NR.72 ではどうだろう。ここでは、NR.67 と NR.70 で用いられていた枠取りによる伝統的な三画面分割構成は完全に放棄され、牧歌的楽園の中央に位置する《善き牧者キリスト》の画面が、アプシス化した内壁全てを埋め尽くすように拡大・展開されている。そこでは、縮小されたリュネッタの僅かな曲線形状までもが牧歌的楽園の大地として取り込まれながら、墓の壁龕の内部空間全てが、故人の救済がすでに実

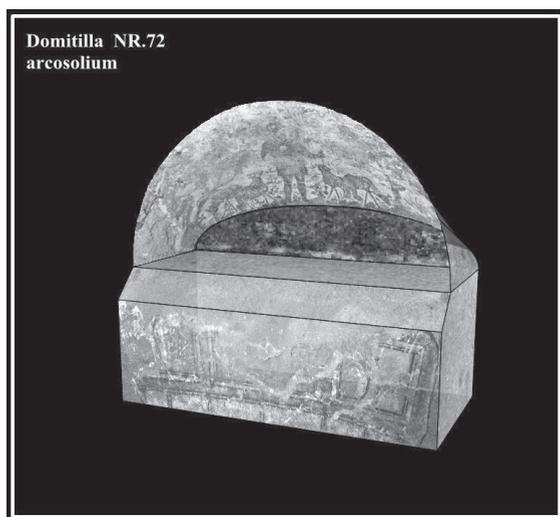


図13 ドミティッラ NR.72 アルコソリウム CG復元図

現された楽園世界そのものとして捉えられていることが理解できる。

また、NR.67やNR.70において重要な関心事のひとつであった救済者により〈救済された者〉(=故人)の直接的肖像描写はここでは一切登場しないものの、このNR.72の装飾壁面を最大限に利用したダイナミックな空間認識の同一線上で類推するならば、ここでは、故人が埋葬された墓の棺部分そのものがリュネッタに続く楽園の大地として認識されている可能性も否定できない。すなわち、死後の天上界の牧歌的楽園世界に到達した故人は、〈救済者〉の足元の大地にすでに〈救済された者〉として横たわっている。伝統的なアルコソリウム装飾の三画面分割構成を完全に放棄し、さらに典型的な他の聖書主題の描写も排除しながら、より自由に、死後の楽園世界の描出のみに専念するNR.72の斬新さは、上述のような墓の構造と装飾、そして、そこに埋葬された被埋葬者の存在すらも含めた、総合的図像解釈を促しているように思えてならない。

最後に、壁画装飾にみられる図像学上の更なる変化の痕跡として、最も重要な壁画主題である〈救済者〉の人体高の変化についても言及しておきたい。従

来の〈ヴォルト型〉アルコソリウムの場合、我々のNR.67の作例にみるように、アーチ内壁天頂部に描かれることが多い《善き牧者キリスト》像の人体高は、アーチの内壁幅の制約上、通常約45~50cm、大きいものでも約65cm程度に留まっている⁴⁴⁾。ところが、NR.70・NR.72に確認されるようなくアプシス型〉構造の導入は、湾曲・傾斜した壁龕内壁に高さのある装飾壁面を発生させ、それによって、《善き牧者キリスト》像は、その人体高が約90~100cm程度に大型化しており興味深い⁴⁵⁾。このような大きさの人体高をもつ図像は、単一墓のアルコソリウムの装飾図像としては最大級のもので、観る者に「救済者」の存在感をより強く印象付けている。

③ 〈アプシス型〉アルコソリウムと視覚効果

ここでは、さらに、〈アプシス型〉という新たな壁龕構造の導入が、そのアルコソリウムを飾る壁画の見え方に与える影響、つまり、それが何らかの新たな視覚効果を生み出しているのではないかという視点から、短く考察を加えておきたい。

我々のNR.67で確認したように、アーチの壁龕が〈ヴォルト型〉に成形された通常型アルコソリウムでは、墓の前に立つ者の眼差しからは、奥壁の半月型リュネッタ部に描かれた故人の肖像は捉えられるものの、アーチ内壁の天頂部に描かれた《善き牧者キリスト》像は、観者が屈んで覗き込まない限り、完全に死角になって目には見ることができない。アーチ内壁左右の側壁に描かれた聖書場面を含む全ての壁画図像を同時に見渡すためにも、やはり、観者はアルコソリウム正面に不自然な姿勢で低く屈まざるをえない。そこでは、故人の肖像が描かれた奥壁・リュネッタは墓参で訪れる遺族の眼差しのために、そして、完全に下向きに描かれたアーチ天頂部を含むヴォルト内壁の「救済者」と「救済の業」を描出する壁画は、むしろ、石棺部に埋葬され横たわる被埋葬者の「眼差し」を前提にしていると考えられるほうが自然かもしれない。

これに対して、NR.70とNR.72に特徴的な大きく傾斜した〈アプシス型〉構造の導入は、結果的に、この見え方に関する問題を巧みに解決していると言え

るだろう。すなわち、〈アプシス型〉壁龕の傾斜壁は、従来の〈ヴォルト型〉では墓の前に立つ観者から完全に死角になっていた最も重要な《善き牧者キリスト》像を、彼らが不自然に屈むことなく確実に捉えることを可能にしている。また、それら壁龕内壁の壁画は、上述のようなその真下に埋葬された被埋葬者の「眼差し」からも捉えられる。

このように、新たな構造を備えたアルコソリウムにおける壁画の見え方の考察は、この〈アプシス型〉の導入が、墓の前に立つ墓参者などの観者に壁龕内の壁画全てを一度に総合的に観賞できるように演出するという、それ以前には存在しなかった新たな視覚効果を生み出していることを理解させる。

④年代考察

最後に、本稿で扱った三つのアルコソリウムの年代考察の問題について短く触れておきたい。すでに冒頭でも言及したように、本稿で扱ったアルコソリウムが出土したドミティツァ南西地区は、これまで、ペルゴラによって4世紀初めから後半にかけて形成・発展したという大まかな地誌学的研究報告が行われている⁴⁶⁾。また、図像学的研究領域からは、本稿のアルコソリウムに近接して存在する同じ地区の墓室 NR.74 内部の壁画について、近年、F. ビスコンティーが4世紀末のものとする見解を提出している⁴⁷⁾。

この地区の詳細な発生史的年代確定に関しては更なる地誌学的研究を待たねばならない。しかし、この地区の複数の墓室が示す多角形平面プランなどの墓室形状の多様化・複雑化、内部空間の巨大化、アプシス構造の導入といった類型学的特徴⁴⁸⁾、また、それらの墓室の壁画人物像が示す〈メガログラフィー傾向〉(図像巨大化傾向)⁴⁹⁾といった特徴を鑑みると、筆者もまた、この地区が、主に4世紀中頃から末頃までの間に顕著に発展したものとするのが妥当、との見解を抱いている⁵⁰⁾。

一方、本稿で扱った3基のアルコソリウムからは、墓碑銘など年代確定に繋がる明確な考古学的手掛かりは残念ながら一切出土していない。しかし、NR.70 と NR.72 の2基に確認される《善き牧者キリスト》像の人体高が大きく

強調される絵画傾向は、先の墓室 NR.74 の壁画に確認される人物像と同じく、4 世紀中頃から末に向かって顕著になるローマのカタコンベ図像における〈メガログラフィー傾向〉の同一線上にあるように思われる。また、アルコソリウム NR.67 のリュネッタ部に描かれた少年の個性的な肖像は、これもまた、4 世紀中頃から末に向かって出現する古代末期の特徴的なリアリズムと同一線上にあることを推測させる。しかし、いずれにせよ、明確な根拠のない現時点では、3 基のアルコソリウムの年代についても、前述のこの地区の地誌学的視点、および墓の類型学的視点を重視し、慎重に、4 世紀中頃から後半との見解に留めておくべきであろう。

5. まとめ

ドミティッラのカタコンベ・地下第一層・南西地区から発見されたアルコソリウム（アーチ型壁龕墓）のなかから、《善き牧者キリスト》像をもつ三つの特徴的な作例 NR.67・NR.70・NR.72 を抽出し、墓室の構造的特徴と装飾図像の関係について考察を行った。その結果、少なくとも 4 世紀中頃から後半に帰属すると推測されるこれらの作例から、主に以下の事柄を読み解くことができた。

まず、第一に、この地区に〈アプシス構造〉への強い志向性を示す特徴的なアルコソリウムが近接して複数確認されるが、その構造的特徴は、4 世紀のモニュメンタルで多様な形状を示す墓室の登場と同様に、地上に初めて出現したキリスト教聖堂の建築要素が地下の一般信徒の埋葬空間に影響を与えた可能性が推測される。すなわち、カタコンベ内の〈アプシス型〉アルコソリウムの出現もまた、これら地上の殉教者記念礼拝堂などが備えていた巨大なアプシス構造を模倣・再現することで、故人の「救済」をより確実なものにしようとする、当時のキリスト教一般信徒の素朴な願いや信仰を表象している可能性が高い。

第二に、ここで確認したアルコソリウム NR.70, NR.72 では、新たに導入された〈アプシス型〉の構造的特徴が、伝統的な《善き牧者キリスト》の図像イ

メージを強調させ、それをさらに豊かに展開する装飾空間として機能している。

この問題に関して、筆者は、以前、《善き牧者キリスト》像の消失プロセスを扱った論考⁵¹⁾のなかで、同様に、地上の礼拝施設からの影響が指摘される4世紀後半の地下墓室に導入された〈アプシス構造〉について、そこに、地上の礼拝堂アプシスを飾っていた《キリストと十二使徒》図が、〈アプシス構造〉という建築要素と共に地下の一般信徒の墓にも導入された可能性があることを指摘した⁵²⁾。

このような、一般に血統や同業者組合など、何らかの繋がりをもつ集団のために造られる墓室の場合とは異なり、本稿で扱ったアルコソリウムという独立した単体の墓、いわゆる単独墓の場合、アプシスという構造的要素は、むしろ逆に、迫害期にまで遡る伝統的な《善き牧者キリスト》像の展開に貢献しており、実に興味深い。墓室という集団の埋葬空間に仰ぎ見るように造られた、モニュメンタルな意味合いの強い大型のアプシスと、あくまでも個人や夫婦といった被埋葬者の「救済」に集中した単独墓の場合の〈アプシス構造〉との間には、大きな質的・機能的差異が存在しているのかもしれない。このような、墓室、アルコソリウム、あるいはロクルス（柵型墓）といった墓の種類や形態によって異なる装飾空間の意味やシンボリズムについても、今後、個別の詳細な考察が必要であろう。

いずれにせよ、本稿で扱った三つのアルコソリウムの存在は、4世紀半ばから後半の一般信徒が抱いていた《善き牧者キリスト》像への強い親近性をあらためて確認させるものであった。《審判者》や《万物の支配者》といった新たなキリスト「権威図像」の出現の時を目前にしながらも、素朴な一般信徒の個人的願いをより素直に描出した単独墓においては、彼らに優しく寄り添う「同伴者的イメージ」を備えた《善き牧者キリスト》像が、いまだ、最も身近な救済者の姿で在り続けていたのである。

註

- 1) ローマのキリスト教地下墓所は2世紀後半から5世紀初め頃まで埋葬施設として使用された。したがって、その墓に遺された墓碑銘や壁画、石棺彫刻などの考古学データは、迫害期を含めた313年以前から以後のキリスト教の変化の痕跡を留めている。
- 2) この問題を扱った論考としては以下のものがあげられる：E. Ramsey, “A note of a disappearance of the Good shepherd from early Christian art”, in *HarvTR*. 77, 1983 (1985) pp.375-378, 山田順 『『善き牧者キリスト像』の消失プロセス—ドミティッラのカタコンベ壁画を中心に—』、『キリスト教史学』第63集(2009) 114-115頁。
- 3) これまでの現地調査に基づく主な拙稿は以下の通り：「初期キリスト教徒の来世観とその異教性 — ローマ、サンセバスティアーノ・カタコンベのヘルメス像をめぐる—」、『キリスト教史学』第53集(1999), 137-161頁；「キリスト権威図像の出現」, 西南学院大学『国際文化論集』, 第17巻・第2号(2003) 105-153頁；“Due nuove pitture del cubicolo ‘dei Sei Santi’ nel cimitero di Domitilla”, *Rivista di Archeologia Cristiana* = *RivAC*, 84 (2008), pp.473-504；「カタコンベ壁画『聖人図』再考—ドミティッラ・墓室〈39NR〉の壁画解釈をめぐる—」, 西南学院大学『国際文化論集』, 第24巻・第2号(2010) 213-226頁「ドミティッラのカタコンベの巨大人物像—新発見壁画とその新たな考察—」『地中海学研究』第35号(2012) 31-54頁。
- 4) アルコソリウムなど地下墓所の墓の類型については以下を参照：P. Testini, *Archeologia Cristiana*, Bari, 1980, pp.92-111.
- 5) *Ibid.* p.84.
- 6) 《牧者キリスト》像の作例一般に関しては以下を参照：A. Nestori, *Repertorio topografico delle pitture delle catacombe romane, II edizione riveduta ed aggiornata*, Città del Vaticano 1993 (=NR), p.195, F. Bisconti, *Temi di iconografia paleocristiana*, Città del Vaticano 2000, pp.138-139.
- 7) ドミティッラのカタコンベに関する研究は以下を参照 Ph. Pergola, *Le catacombe romane. Storia e topografia*, Roma 1997, pp.211-216；“La région dite du Bon Pasteur dans le cimetière de Domitilla sur l’Ardeatina, étude topographique de son origine”, *RivAC* 51, 1975, pp.65-96；“L’origine delle regione detta dello Scalone del 1897 nelle catacombe di Domitilla”, *RendPontAC*, 58, 1985-1986, pp.49-60；U. M. Fasola, *Die Domitilla-Katakombe und die Basilika der Märtyrer Nereus und Achilleus*, Città del Vaticano 1989.
- 8) *Giornale degli scavi*, Pontificia Commissione di Archeologia Sacra, 1896-1898, pp.125-128.
- 9) Testini, *op.cit.* pp.201-206.
- 10) Pergola, *Le catacombe romane...*, *op. cit.* pp.211-214.
- 11) ドミティッラのカタコンベの発生史・発展史に関しては以下を参照：Testini, *op.cit.*

- pp.201-206, Pergola, *Le catacombe romane...*, op. cit. pp.211-214.
- 12) *Giornale degli scavi*, op.cit. pp.125-128.
 - 13) この地区からは《善き牧者キリスト》像のフレスコ画が全部で7点出土しており、そのうちアルコソリウムの作例が5点、墓室内アプシスの作例が1点、ロクルス（棚型墓）の壁画作例が1点確認されている。
 - 14) Pergola, “L’origine” op. cit. pp.55-57.
 - 15) この現地調査は筆者が所属する西南学院大学の在外研究期間（2011年10月－2012年9月）にその研究の一環として行った。
 - 16) Nestori, op. cit. pp.129-130; G. Wilpert, *Le pitture delle catacombe romane*, Roma, 1903, tavv.200-1,2,3.
 - 17) アルコソリウムには棺部分の底を深く掘り込み何重にも埋葬スペース重ねたタイプも存在するが、ここではそのような特殊な構造は確認できない。
 - 18) 同様のローマのカタコンベ壁画の類似例としては、チリアカのカタコンベの Zosimiano のアルコソリウムなどがその代表例として挙げられる：Testini, op. cit. p.84.
 - 19) ローマのカタコンベ壁画図像レパートリーのなかで、同様の故人の個人的な肖像画の作例としては以下を参照のこと。Wilpert, op. cit. tav.174-176, 200-a, 207, 208-209.
 - 20) Bisconti, op. cit. pp.138-139.
 - 21) 〈獅子の穴のダニエル〉場面の図像研究に関しては以下を参照：Bisconti, op. cit. p.162.
 - 22) 〈モーセによる泉の奇跡〉場面の図像研究に関しては以下を参照：ibid, p.224.
 - 23) 「ダニエル書」6：16-23
 - 24) 「出エジプト記」15：23-25
 - 25) Bisconti, op. cit.
 - 26) Nestori, op. cit. p.130; Wilpert, op. cit. tavv. 190, 191-1, 2.
 - 27) 〈finto marmo〉：実際の大理石板による壁面装飾を模して描かれた壁面装飾をいう。
 - 28) 〈ラザロの復活〉場面に関しては Bisconti, op. cit. pp.201-203 を参照。
 - 29) 「ヨハネ福音書」11：1-44.
 - 30) Nestori, op. cit. pp.131; Wilpert, op. cit. tavv. 117-2.
 - 31) ここで言う単独墓とは、血族や同業者組合などの共有埋葬施設としての墓室に対して、個人用の墓、あるいはひと組の夫婦や兄弟のための孤立的に存在している墓のこと指す。アルコソリウムには地下通路沿いに単独墓として造られたものと、特定の墓室内部に造られたものが存在する。
 - 32) NR.73 (Nestori,, op. cit. p.131. Wilpert, op. cit. tav. 192, NR.75 (Nestori, op. cit. p.132; Wilpert, op. cit. tav. 198).
 - 33) Nestori, op. cit. pp.131-132
 - 34) Ibid. p.132; Wilpert, op. cit. tavv. 193, 194-1, 2, 195-1, 2; O. Marucchi, *Le Catacombe Romane. Opera postuma*, Roma, 1933, pp.170-173.

- 35) ペルゴラをはじめドミティッラのカタコンベに関するいかなる研究者もこの状況について一切指摘していないのは、まことに不可解である。
- 36) V. Fiocchi Nicolai, et alt., *Le catacomb cristiane di Roma. Origini, sviluppo appariti decorative, documentazione epigrafica*, Regensburg, 1998, pp.43-44.
- 37) Testini, *op. cit.* pp.559-560, R. Krautheimer, Rome. *Profile of a City* 312-1308, Hong Kong, 2000, pp.21-31.
- 38) 4世紀前半, 「教会の平和」直後から建設が行われた殉教者記念礼拝堂など地上の礼拝施設に関しては以下を参照: Testini, *op. cit.* pp.559-602. また殉教者の墓に近接して建設された地下礼拝堂に関しては以下を参照: Fiocchi Nicolai, *op. cit.* pp.59-65.
- 39) 近年の研究成果としては以下の文献を参照: V. Fiocchi Nicolai, *La nuova basilica paleocristiana circiforme della via Ardeatina, Via Appia sulle ruine della magnificenza antica*, Rome 1997, pp.78-83; *Strutture funerarie ed edifici di culto paleocristiani di Roma dal IV al VI secolo*, Città del Vaticano 2001, pp.55-58; E. La Rocca, *Le basiliche cristiane "a deambulatorio" e la sopravvivenza del culto eroico*, Aurea Roma, Roma 2000, pp.204-220; Th. Lehmann, *Circus oder Basilica? Zu einem Grund (riss) problem in der Archäologie*, *Festschrift für Hans Wiegartz*, Münster 2000, pp.163-169.
- 40) 代表的な作例としては, サン・カリストゥスのカタコンベ地上で1990年代にフィオッキ・ニコライによって発見された記念聖堂の例があげられる。この聖堂については以下の文献を参照: V. Fiocchi Nicolai, *La nuova Basilica Circiforme della via Ardeatina*, *Rendiconti della Pontificia Accademia Romana di Archeologia*, LXVIII, 1995-1996, pp.69-233, pp.69-233.
- 41) 初期キリスト教の聖人崇敬に関する考古学的, 図像学的痕跡については以下の拙稿を参照されたい: 「初期キリスト教における聖人崇敬と民衆信仰—聖女ペトロニッラの図像とその意味—」, 西南学院大学『国際文化論集』, 第22巻・第1号, 2007年, 81-112頁。
- 42) フィオッキ・ニコライは, 4世紀の墓室構造におけるアプシスの採用については言及するものの, 本稿で筆者が指摘するアルコソリウムのアプシス形状の採用については一切指摘していない。
- 43) F. Bisconti, "Sulla concezione figurative dell'habitat paradisiaco - a proposito di un affresco romano poco noto", *RivAC*, 66 (1990) pp.25-80.
- 44) NR.67の《善き牧者キリスト》像の人体高は64cmと通常型のアルコソリウムの図像のなかではかなり大きい。
- 45) NR.72の《善き牧者キリスト》像人体高は99cmにも達している。
- 46) Pergola, "L'origine ..." *op. cit.* pp.55-57.
- 47) F. Bisconti, "La pittura delle catacombe l'arte paleocristiana delle basiliche", in M. Andaloro (ed.), *L'Orizzonte tardoantico e le nuove immagini*, 312-468, Roma, 2006, pp.210-211.
- 48) Fiocchi Nicolai, *op. cit.* pp.43-44.

- 49) Bisconti, “La pittura delle catacombe...” op. cit. p.211, M.R. Menna, “Cristo e i dodici apostoli nel cubicolo ‘dei Pistores’ nella Catacomba di domitilla”, in Andaloro, *op.cit.*, p.179.
- 50) 墓室 NR.74 の年代考察については以下の拙稿のなかでも論じているので参照されたい。『善き牧者キリスト像』の消失プロセス……」 op. cit. 114-115 頁。
- 51) *ibid.* 注 2 参照。
- 52) *ibid.* p.124.

図版クレジット

- 図 1. 以下の平面図をもとに筆者が加工。O. MARUCCHI, *Roma Sotterranea Cristiana. Descrizione analitica dei monumenti esistenti negli antichi cimiteri suburbani*, Roma, 1909, tav. I-IV.
- 図 2. 図 1 の平面図をもとに筆者が作図
- 図 3 ~ 10b. 筆者による撮影または作図
- 図 11 ~ 13. 作図：江川敏章